

## エクステンジリングス

甘木数彦

### 第四章

—

灰色の天井に画鋸が一つ刺さっている。ずいぶん長いこと放っておかれているようで、表面にサビが浮いている。

「鳶春」

声のした方を向くと、母親が立っていた。隣には父親もいる。少し離れたところには主治医の羊吉の姿も見えた。それでやっと鳶春の中で見えているものが統合され、意味づけられた。病室だ。

両親はどちらも憔悴しきっていた。徹夜明けのむくんだ顔が鳶春のことを不安そうに見ている。

「大丈夫か」

父親の言葉に鳶春はうなずいた。まだ前後の脈絡がつかめていない。

「寿太郎さん、美織さん、ちょっといいですか？」

言いながら羊吉はベッドの枕元に立つと、少しだけ身をかがめた。

「鳶春君、これは」

指を四本、立てて突き出す。

「四本です」

「じゃ、これを目で追って」

言われるままに、羊吉が手にしたペンライトの動きを追う。

「やっぱり、体に異常はないですね。ただのエネルギー切れです」

羊吉はペンライトを手早く胸ポケットに戻しながら言う。

「それじゃ、どうしてここに運ばれたか憶えてる？」

何気なく答えようとして、鳶春は言葉を失った。記憶を探る手が何も捕まえられなかったのだ。鳶春は求められている記憶を掘り出そうと、記憶の中をまさぐった。だが何も出てこない。

「じゃ、最後に憶えているのは？」

「駅に行こうと思って学校を出て」

今度はすんなり答えられた。駅へ向かう途中の景色も思い浮かべられる。だが不思議なことに、どこから記憶が途切れているのかがハッキリしない。鳶春は羊吉へそのことを告げた。

羊吉は腕を組んで考え込み、それから言った。

「ご両親のどちらか、ちょっと来てもらえますか？」

「じゃ、僕が」

寿太郎が答え、二人は病室を出て行った。

母親と二人で病室に残されると、鳶春の中でまるで幼児扱いをされているような、焦燥感とみじめさがわけもなくこみ上げてきた。

鳶春はベッドの上で体を起こすと、あらためて母親を見た。うつむき気味に座り、無意

識に肩をやや縮めている姿は、どこか懐かしかった。しばらく考えて思い出す。まだ幼い頃、鳶春が病院で検診を受け待合室へ戻ったときの母がよく同じような感じで座っていたのだ。今になってあの頃の母親が鳶春の体について、どれだけ神経質になっていたのかが解ったような気がした。

「ごめん。心配かけて」

わだかまる重たい気持ちをすこしでも紛らわせようと、鳶春は口を開いた。

「いいの。無事だったんだし」

応える声は強張っていた。堅さの裏に弱々しさが透けている。

「おれは、どうして」

鳶春の言葉に美織は顔を上げた。途端に肩から力が抜ける。

「それがね。昨日の夜、あなたの帰りが遅いからメールしたの。それでも返事がないから通話しようとしたらつながらなくて。で、しょうがないから画像窓口に問い合わせたら、学校を出てどこかへ向かってる途中で撮影されたのが最後だって言われて」

画像窓口というのは、都市が保管する膨大な画像から必要な情報を検索して開示してくれる窓口だった。もちろん用途によっていろいろな手続きや本人証明が必要だが、二四時間オンラインで受け付けてくれる。

「それで、お父さんとも相談して窓口の人にも勧められて警察に相談したの。大げさかなとも思ったんだけどあなたの体のこともあるし、誘拐事件とかもあるでしょ。それで捜索願を出して探してもらったんだけどダメで、どうしようと思ってたら家のそばで倒れてるのを警察の人が何時間か前に見付けて、病院に運んでもらったのよ」

自分の体験を何度も頭の中で繰り返していたのか、美織は早口で説明した。鳶春はその間、なにか思い出しはしないかと自分の記憶をさかのぼろうとしてみたのだが、母親の言葉は一つも手ごたえをもたらしてくれなかった。

美織が話し終わると同時に、看護婦が部屋へ入ってきた。廊下で待っていたらしい。

「警察の方が」

その言葉に合わせて男が二人、戸口に立った。一人は背の高い白人で、顔は若い髪が薄くなってきている。もう一人はがっしりとした体格の日本人で、五〇歳は越えているように見える。鳶春はその、年配の方の刑事をどこかで目にしたように思った。

看護婦がその場を去ると、二人は中へ入ってきた。

「常若署の者です」

若い方はウォルター・ブラウン。年配の方は宇部永一という名前だった。

「意識が回復されたばかりで申し訳ないのですが、ちょっとお尋ねしたいことがあります。かまいませんか？ いちおう、ご主人とお医者さんの許可はもらったんですが。いやいや、取調べとか、そういうんじゃないから安心して下さい」

ウォルターが言う。柔らかな口調から気遣いが感じられた。

「ええ。あの、どうぞ」

戸惑った様子の美織は鳶春へ確かめもせずそう答えて立ち上がるろうとした。

「ああ、いいんです。お母さんも居てください」

ウォルターの言葉に、美織は浮かしかけた腰を下ろす。永一は名乗ったとき以来、一言も喋っていない。額に寄った気難しそうなシワが、鳶春の記憶に引っかかる。

「えっとですね。捜査を依頼された以上は調書を作らなきゃならなくて、それで来たんですが、実は私たちは別件を担当しています。それと今回のことに関連があるんじゃないかと考えたわけです。そういうわけで、話を聞かせてもらいたいんだ。いいかな？」

最後の言葉は鳶春一人へ向けられたものだった。鳶春はうなずく。

「まず、一昨日の夕方から今まで、何をしていたのか教えてくれないかな」

「それが、憶えてないんです」

「憶えてない？」

永一が言うと、なんだか咎められているような気がした。

「学校を出たところまでは記憶があるんですけど」

鳶春は弁解がましい口調で付け足した。

「じゃあ、そもそもどこへ行こうとしていたのか、憶えてる？」

鳶春の言葉を信じたのかどうか、ウォルターは質問を続ける。

「友達と会う約束だったんです」

「だれと？」

鳶春はすぐには答えず、母親の方を見遣った。美織は落ち着かなさそうに鳶春の視線を受け止める。ウォルターの顔に怪訝そうな色がごく薄く、混ざった。

「苗字は出てこないんですが、ウェンディという子です。留学生でミックススクールに通ってるって……」

ウォルターも永一も何も言わない。鳶春は何かマズいことを口にしてしまったのかと、不安な気持ちで二人を見る。美織は無表情を装っていて、何を考えているのかは解らない。

「その女の子とはどうやって？」

永一の声にはさっきまでとは違う響きがあった。

「散歩の途中でたまたま知り合いになって。まだそんなに親しいわけじゃないんです」

「まだ？」

美織と永一が同時に声を上げた。二人は互いを見て、気まずそうにする。

「あんまり親しくないから、くわしことは知らないってことです。つまり、その、それだけのことで。あの日も会って、ちょっと散歩でもして話をしたりとか、特に用事があったわけじゃないんです。ところで、別件って言ってましたよね？」

鳶春は話題を変えた。

「そうそう。そうなんだよ」ウォルターもその場の雰囲気を変えようと、必要以上に勢い込んで言う。「じつは、例の誘拐殺人事件のことなんだ」

「あの、おれは何も」

「だろうね。ただ、君が犯人と接触したか、姿を見かけた可能性がある。ニュースなんかで知ってるだろうけど、犯人の姿は都市内のカメラで捉えられない。君も消息を絶ってから発見されるまでの画像が一枚も見あたらない」

「この子が疑われてるんですか？」

美織に向かってウォルターは苦笑した。

「ですから、そういうわけではないんです。実は、犯人がこの街をうろついている痕跡を示していると思われる動画が一つだけありまして。定点カメラが巡回ロボットを撮影したものなんですが、一瞬だけロボットが画面から消えるんです。确实、というわけじゃない

んですけれど、このとき巡回ロボットとカメラの間に犯人が入ったのではないかと考えています。動かないものでしたら、犯人の立っている部分に撮り貯めておいた画像を合成もできますが、動くもの相手にはそうもいかないでしょうから。ロボット側の画像からもほぼ同じタイミングで、フレームが数コマ消えているので、偶然とは考えにくいでしょう。だから私たちは、鳶春君の画像がどこにもないのは、犯人と一緒にいたからじゃないかと推測したわけです」

「じゃあ、記憶がないのも？」

「もし推測が間違っていれば、犯人によって消された可能性がある」

「でも、どうしてそんな手間の掛かることを？」

ウォルターは首をひねった。

「さあ。子供しか手にかけないとか何かこだわりがあるのかもしれない。異常犯だからね」  
鳶春は自分が犯人と一緒にいたという状況を想像してみようとした。記憶がないせいか、それはどうしてもただの空想にしかならなかった。

「さて、君に記憶がない以上、残念だけど僕らの聞き取りもこれで終わりだ。こんな状況でいろいろと聞かせてくれてありがとう。もし、なにか思い出したら連絡して欲しい。どんなことでもいいから」

二人の刑事は美織にも挨拶して部屋を出ようとした。

「ああ、そうだ」ウォルターはドアの前で足を止めると振り返った。「君があの日、女の子と会う予定だったことを知ってる人とかはいるかな？」

「同じ部活の、田村厘一って奴が知ってます」

「そうか。ありがとう」

今度こそ本当に、二人は部屋を出て行った。鳶春としては美織にも一緒に部屋を出て欲しいところだった。

美織が大きく息を吐いた。その顔はさらに血の気が失せ、それでいて妙な脂で表面が照っていた。目を閉じ、こめかみに手を当てている。それが、母親が落ち着こうとするときにする仕草だということを鳶春は知っていた。

少しして美織は目を開けると力無く微笑んだ。

「刑事さんの考えが正しくても間違っている、とにかくあなたは無事だったんだから」それは自分自身へ言い聞かせているみたいでもあった。

「ごめん。心配かけて」

「おなか空いたでしょう？ 看護師さんに言って、飲み物もらってきてあげる」

美織は鳶春の言葉へ応えずにそう言うと、部屋を出て行った。

一人きりになってみると、ようやく意識を取り戻したのだという実感が湧いてきた。刑事たちと交わしたばかりの会話が蘇る。その場では気付かなかったが、刑事たちの態度は最初から最後までどことなく不自然だった。鳶春の記憶がないという言葉に信じているようなのも気になった。そこを疑っているのは話が進まないからだろうか。そういえば、ウェンディの連絡先さえ尋ねられなかった。留学生なのだから、調べればすぐに判るのだろうけれど。

そこで鳶春は、目覚めてから最も憂鬱なことに思い至った。自分は結果的に、ウェンディとの約束をすっぱかしてしまったことになるのだ。怒っているだろうか。

鳶春の端末はサイドボードの上に、たたんだ服と一緒に置いてあった。そこで初めて、自分が入院着というのか、薄手の生地のできた薄青い服を着せられていることに気付く。

端末を起動させてみる。ディスプレイに着信は残っていない。メールも来ていない。鳶春は廊下から足音がしないか耳を澄ませ、何も聞こえないことを確認するとウェンディへ送るメールを書いた。まず謝り、素直に現状を伝え、また謝り、落ち着いたらまたメールをするという言葉でしめくくった。その文面を何回か読み返し、送信する。なんとなく、連絡を絶ちきられることはない気がした。もし怒っていたとしても、それは二四時間以上も前のことだ。

美織はなかなか戻ってこなかった。飲み物がすぐ手に入れられないのか、羊吉や寿太郎と話でもしているのか。鳶春は枕元に端末を置くと、ベッドへ横になって目を閉じた。

端末が鳴った。ウェンディからだ。今すぐ通話に出たいという思いと、少しでもそれを先延ばしにしたいという思いが衝突する。だが、ウェンディとこれからも連絡を取りたいのなら、出ないわけにはいかない。

「もしもし」

「あ、もしもし？ ウェンディだけど。メール読んだよ。こないだはあなたが来なかったから、しばらく待って帰ったんだけど……いまはまだ病院？」

スピーカーから聞こえる声は、心配そうに揺らいでいる。鳶春はできることなら声と共に自分もウェンディの元へ行きたかった。

「ああ」

やっとそれだけを回戦に乗せて送り出す。

「お見舞いに行っても？」

「さあ、どうかな。怪我はないし、すぐ退院するかもしれないから。ああでも、もし長く居ることになったら連絡するよ」

「わかった。必ず連絡して」

「約束する」そこで鳶春はふと思いついたことを尋ねてみた。「そういえば、ウェンディって名字はなんだっけ？」

「宇部、だけど」

鳶春の中へ急速に、厭な冷静さが満ちてくる。

「ひょっとして忘れちゃったの？ 記憶力には自信があるって言ってなかったっけ？」

「さすがに、初対面の時に一度聞いたきりだとね。そんなことより、ホームステイしてる伯父さんの職業ってさ、刑事だっけ？」

「そうだけど。どうしたの急に」

冷静さが体の中心で引き絞られるような気がした。

「あのさ。おれの所に来た刑事、宇部永一って名乗ってたんだけど」

沈黙ののち、深い溜息が聞こえた。

「解った。たぶん色々とおあなたのこと質問されるだろうけど、なんとか相手するよ」

どうやらウェンディも、驚くと冷静になるタイプらしかった。

「それで、迷惑かけたお詫びっていうか、今度いいところに案内しようと思うんだけど」我ながら脈絡のない話の運びだと思いつつ、鳶春は言うてみる。予想どおり、ウェンディはすぐには返事をしなかった。

「いや、嫌ならいいんだけど」

こういうことをすぐ言ってしまう自分の押しの弱さが、鳶春には苦々しかった。

「おごりなら、行かないこともない」

「わかった。じゃあまた連絡してよ」

通話を終わると、鳶春は端末を手にしたまま横になった。錯覚なのは解っているが、体が重い。足音が近付いてくるドアが開き、両親が入ってきた。

「ごめんなさい。はい、これ」

鳶春は体を起こして母親が差し出す紙コップを受け取り、中に入っている液体を飲み干した。すぐに全身を覆っていた体の重さが消える。

「お医者さんから説明を聞いてたんだけど、やっぱり体にも脳にも問題はないみたい。ただ記憶のこともあるし、今日は一晩入院して、明日再検査してそれで異常がなければ退院してもいいって」

「わかった。じゃあ、退院できそうになったら連絡する」

「心配ないって言ってたから、たぶん大丈夫だろ。ま、ま、退屈だろうがおとなしくな」  
寿太郎はいつものように早口でそれだけ鳶春の肩を軽く叩き、部屋を出ようとした。

「お金、少しだけど置いてくからね」

美織は慌てて自分の端末から鳶春の端末へチャージをすると、入り口で待っていた寿太郎に追いついて一緒に部屋を出て行った。足音が遠ざかる。行方不明の息子が無傷で発見され、しかも犯罪に巻き込まれていたかもしれないというのに、ずいぶん呆気なかった。とはいえ、無事だったのだからこれ以上心配されても気が重い。

端末に表示されている時間はまだ二〇時を過ぎていない。消灯が何時なのかは知らないが、端末を使って適当に時間をつぶす気にもなれなかった。仕方がないので厘一にメールを書く。すると、すぐに返事が返ってきた。どうやらかなり心配をしていたらしく、ネット中のあらゆる「気遣いの言葉」を引っ張り出してきたかのような文面だった。恥ずかしげもなく並んだ言葉は思わず読み飛ばしたくなるほどだったが、その正直さが嬉しくもあった。とりあえず、明後日からは学校に行けそうだからと返事をしたところで、羊吉が部屋へ入ってきた。

「ええどう調子は？」

相変わらず切れ目のない喋り方だ。

「特に、悪くはないです」

「記憶がないんだって？ さっきご両親には説明したけどもこれ」

羊吉は手元の端末を操作すると、壁にはめ込まれたディスプレイへ図表や画像を映し出した。

「機体の方の検査結果、数字の意味はいろいろあるけど要はこのそれぞれ項目の右端、ね？」

これが緑だと異常なし」

数字が並んだ表の右端には、ずらりと緑のマークが続いていた。

「で脳の方だけど」

言いながら画面を切り替える。見覚えのある映像が重なり合って表示された。

「脳の輪切り映像だな。つまりな。これもまあ異常はない。脳外科の先生にも見てもらった」

輪切り画像を立て続けに切り替えていく。脳の断面の画像が徐々に大きくなり、再び縮んで消える。

「じゃあ、記憶がないっていうのは」

羊吉は腕を組むと唸った。

「一つ考えられるのは脳のエネルギーが欠乏したというこ、と、か、なあ。もちろん危険だからそうはならないように作られてるけどね。あとは刑事さんも言ったように何かの方法で消されたか。まどんな方法か知らないけれど。念のため明日再検査はするけれども、するけれども異常はないんじゃないかな」

そこで羊吉は含み笑いをした。鳶春はその笑いに意味がないことを、これまでの経験から知っていた。どうも話の流れを整えているだけらしい。

「それで、これからどうすればいいんですか？ 体を入れ替えて入院したときは何時間かごとに検査とかありましたけど」

「特に何も。ゆっくりしてればいい」

明日の朝、検査の前にまた来ると言い残して、羊吉は部屋を出て行った。

これからどうしよう。そんなことを思っていると、端末が振動した。ウエンディからのメールだ。それだけで意味もなく何かを期待してしまう。

送られてきたメールには、あの日なにをすつもりだったのかが書かれていた。そしてウエンディは鳶春が来なかったので、一人で広場へ向かう狭間道へ行き、そこが緩やかな坂なのか確かめる実験をしたということだった。

メールには動画も添付されていた。ライトに照らされ、緩やかに曲がった細い道が薄暗く浮かび上がっている。やがて画面の手前から小さなボールが、カーブの向こうへ見えなくなるまで加速しながら転がっていった。

もし本当にあの狭い道が上り坂なら、広場は六階のどこかにあるということになる。これまで考えてもみなかった可能性だ。鳶春はベッドの上であぐらをかくと端末の画面に市内地図を呼び出し、位置の割り出しに没頭した。

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>